

2025年7月6日

「燃え尽きない柴」

出エジプト 3章1～6節

矢田紫野師

主題：主は私たちの日常とあらゆる時間に働いておられる。

主の聖なるご臨在の前にいつもひれ伏そう。

今日は、出エジプト 3 章の主がモーセをイスラエルの指導者として召されたところから、主は私たちにどのように向き合ってくださいのかを考えてみよう。主は私たちの日常の中に常におられて、無駄なことはひとつもなされないのだ。私たちは常に主のご臨在を意識し主の前にひれふさなければならない。

1) 羊飼いの 40 年間: 無駄な時間は一瞬たりともない

1 節、モーセはイテロの羊を飼っていた: モーセのそれまでの生活を復習。ヘブル人たちがエジプトの奴隷になっていた時代にモーセは生まれ、いろいろな経緯の中、エジプトの王ファラオの娘の養子になって王宮で育った。王宮での何不自由しない生活。当時の最高級の知識も技術も身につけた人生。40 歳まで。40 歳でエジプト人を殺した罪に問われて荒野に逃げ出し、レウエルの婿となって羊を飼う生活を始めた。

考えてみて。それまで 40 年間王族の生活をしてきて、召使いやらがいる生活をしてきた人が、羊飼いをする生活を始めるのはどうか。毎朝羊を牧草地に連れて行く、水汲みをする、糞の片付けをする、羊の病気や怪我の有無の確認と手当てをする、搾乳する、毛刈りをする、獣から守る、寒さ暑さから守る、出産と子家畜の面倒を見る、etc. やったことのないモーセがこれらをするのは大変だったはず。

ただ、それまでの上流階級で育った 40 年間に身につけた知識や経験はほとんど何も役に立たない生活。そういった特別な知識や経験が役に立たないというのはもったいないといえどもったいない。40 年間は無駄な時間だったのか。

決してそのようなことはない。特別なことは何も起きなかったように見えるこの 40 年間は、主が委ねようとしていた働きをするために必要な訓練を受ける期間だった。いうことを聞かない、勝手な方向に行く羊の群れを守り、導き、養う 40 年間は、その次の 40 年間何十万というイスラエルの民を率いる指導者となるために必要な訓練の期間だったのだ。そして最初の王族として暮らした 40 年間があったからこそ、エジプトのファラオに直接話ができたのだ。

特別なことが起きないのは無駄な時間を過ごしているのではない。自

分が期待したような生活ではなくても、忍耐を必要とする日々であっても、それは主のご栄光を表すために必要な訓練の期間でもある。主の前に意味のない時間というのは一瞬たりともないのだ。

2)いつもの荒野に燃える焼け尽くされない柴：主は日常の中にご臨在される

2 節 柴の中の炎：その日モーセはいつものように羊の群れを追っていた。すると柴が燃えていた。荒野で柴が燃えること自体は珍しいことではないだろう。アジアの草原地帯でも雨が降らず乾燥した夏に草原で自然発火による火事が起こることはないことではない。40 年も荒野で羊を飼っていたモーセなら、以前にもそういう光景を見たことはあっただろう。

しかしその日モーセはおかしなことに気がついた。燃えているのだけれども、燃え尽きないのだ。燃えているなら隣の柴に燃え移るとか、燃え移ったあとに元々燃えていた柴は鎮火するとか、炎の勢いに変化があるはず。それが無い。当初何気なく見ていただけだったんだらうが、いつまで経っても燃え尽きないのは、どうにも不思議なことだ。どうしてなのだろう？と近寄ってよくよく見てみたくなった。ところがそれは、神がそこにおられることのしるしだったのだ。

神が私たちに現れるのは、何か特別なところであるとは限らない。いつもの場所、普段通りの日常生活を送っている時であるかもしれない。丁度この時のモーセに神が現れたように。モーセはその日いつも通りに家を出て、いつものように羊を追っていただけなのだ。まさか神がその日モーセに現れるとは想像もしていなかったはず。

神はどこででも私たちに会うために現れることができる。しかし私たちは注意深く観察していなければならない。車を運転している時、台所で料理をしている時、友人と話している時、その時に何かあれ？と思う、何か小さな違和感を感じることもあるなら、その感覚を大切にしよう。あれ、本当にこれでいいのかな？あれ、これってこうだったっけ？その気がついたことこそ、「燃え尽きない柴」、神が呼びかけているかすかなしるしかもしれないのだ。神は、私たちの日常の中で私たちに語りかけられるのだ。私たちは神の臨在を注意深く見分けなければならない。

3)あなたの父の神の、聖なる地：主のご臨在のあるところ、そこは聖なる地である

燃え尽きない柴を不思議に思って近寄ったモーセに、神は「ここに近づいてはならない。あなたの足のくつを脱げ。あなたの立っている場所は、聖なる地である」と言われた。

モーセが近づいたそこは、聖なる地であった。いや、神が臨在されるころ、それはすべて聖なるところである。興味本位でうかつに汚れた者が近づくなれば、たちどころに滅ぼされてしまうほど聖い。私たちの想像をはるかに超えて聖い、力強く、偉大な方、それが神である。

ここは聖なる地である、と言われた神のことは何を意味しているだろうか。神の臨在されるころ、それはどこであれ聖いということは、私たちの日常のいつもの場所もまた、神の臨在によって聖い場所でありえるということだ。私たちが気が付かずにそこに燃え尽きない柴はあるのかもしれない。いや、私たちの霊の感性が鋭敏であるならば、この世界のあらゆる場所、すべてが神のご臨在で満ちていることに気がつくはずなのだ。なぜならこの世界は神によって支配され、神によって導かれているのだから。私たちの霊の目が鈍くて見えてないだけ。

ここが聖なる地である、ここに神がご臨在しておられる、と知ったなら、私たちはくつを脱ぎ、モーセがそうしたようにひれ伏すのである。

神の聖さと自分の状態がかけ離れていることを私たちはどれだけ自覚しているだろうか。私たちは自分が汚れていてであってもそれがいつものことだとあまり問題に感じない。神の聖さは丁度光のようなものだ。部屋が真っ暗だと散らかってゴミだらけでもよく見えないから気にならない。光があっても暗い電球だとちよつと散らかってるかなぐらいでまあいいかとなる。しかしそれが最近の電球のようにとても明るくて部屋の隅々まで照らすような光であると、床に落ちているほこり、机の上のシミまではっきり見えるようになる。恥ずかしい限りだ。

神がいかに聖い方であるかを知れば知るほど、言い換えれば光であられる神の前に自らが立っていることを知れば知るほど、私たちは神の前に自らを恥じてひれふさざるを得なくなる。神の前では自己弁護も通用しな

い。なぜなら神はすべてご存知だからだ。私たちがどれだけ怠惰で、やることをやってなくて、無責任で、ことを隠して・誤魔化してきたかを。

それでも神は、モーセを呼び出したように、私たちをも呼んでおられる。なぜか。それは、私たちを神の働きのために、神のご栄光を表す働きに召されるため。どれほどひどい者であっても赦し、ご自身のために建てあげ用いることで、神の憐れみと恵み深さは表されるのだから。

4) 結論

モーセはかつて殺人を犯し逃げ出した。隠れるようにして羊飼いになり、そのまま人生を終えてもおかしくなかった。それでも神はモーセを忘れてはおられず、40年かけてイスラエルの指導者として荒野で訓練された。

私たちの過去がどうであるかは人によって様々である。しかしどのような人生であっても無駄な時間は一瞬たりともない。すべての時を用いて、神は私たちをご自分の栄光を表す働きをするために訓練しておられる。喜びの時も、忍耐を必要とする時も、すべてが神からの贈り物であり、日常のあらゆる瞬間に神は臨在しておられる。私たちの日常のどこに神がご自身を表しておられるか、私たちは注意深くあろう。神の臨在を示されたら、へり下ってひれふそう。神は私たちが焼き尽くすために私たちに近寄ろうとしているのではない。私たちが燃え尽きない柴のように、永遠に輝く神の栄光を表す存在となるために、私たちが召そうとして呼んでおられるのだ。

今週のどの瞬間に皆さんは神の臨在にであうだろうか。注意深くあろう。そして神の臨在の前に喜びを持って、そして最大限のへりくだりを持ってひれふそう。神は私たちとともにある。